
死ぬる体、生きゆく心

星沢青嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死ぬる体、生きゆく心

【Nコード】

N0124X

【作者名】

星沢青嵐

【あらすじ】

友達を庇い、大型トラックに轢かれたと思ったら、あの戦国BARAの世界に落とされました。ここからどうしたらいいのでしょうか。ねえ？ていうか私の前にいるのは政宗様じゃないですか！：目指せギャグ！なシリアス多め。になる予定。

1 死ぬこと（前書き）

全く違うものに変身させました。
楽しんでいただけると泣いて喜びます。

1 死ぬこと

今日のように暑い日には家から出たくないものだ。だがしかし！今日はやるべき事のために出かける。私の生きがいを救いに！中古のゲームを買いに！

「ばっさら ばっさら」

傍から見たら頭がアレな人しか見えないだろうけど、気にしないぜ！

大好きな「戦国BASARA」を買いに行くのです！だからムダにテンション高い。

んで数十分後。

歩いて中古ゲームが売ってる店に到着。本当は車で来たかったけどまだ中学1年の私が運転出来るわけでもなく。親は仕事で送ってもらえるはずもなく。

汗をハンカチで拭いて、店という名の戦場に足を踏み入れる。店内はクーラーが聞いてて涼しかった。もう天国でしょう、ここは。

さっそくBASARAを探すと、お目当ての英雄外伝を発見。P S2しかない我が家にはこれが一番欲しかったもの。ちなみに金も無い。英雄外伝買ったために貯めてたのですよ。

まあ実のところ、前も持ってたんだけど、壊れちゃったのね、英雄外伝。何人かレベルMaxにしたのに。くそ、涙出る。

即レジに向かってお会計。本当は新品買いたかったけど、さっき言った通り金がない。誰か1万でいいので下さい。

ルンルン気分店で店を出て、あー暑いなーとか思いながら来た道を戻る。家までやはり遠い。

帰ったらすぐにやってやる、でもあのクソ姉にはやらさん。壊しやがったのアイツのせいだ！

心の中で言ってるつもりだったけど声に出た。ヤバい周りからの視線がイタイ。これもアイツのせいだ。

小学校の前まで来て、友達に会った。早く帰りたいなーって思ってるのが顔に出たのか、「じゃ、じゃあ、帰るわ」なんて言ってるそくさと帰ろうとした友達を、「ちょい待て、なんか話あるんだろ？」と引きとめる。話があるって言ったのは友達の方だ。

一通り話を聞くと、なんとまあ好きな人ができたからなんたらかんなら。私に言うのは筋違いだ。帰れ。

そう言ったらなんかもう泣きそうな顔して。おいおい私はその顔苦手なんだ。可愛いじゃないかも。

「とりあえず告ればいいんじゃない？」

無責任にそう言ってやった。すると友達は、

「そんなのできるわけない…だいたい好きな人にそんなスパツと云えないよ」

なんて的確なツッコミ入れやがった。それに対し私も的確に言うてる。

「私に好きな人はいない。したがって恋愛感情を知らない。初恋もまだだ。なので私からアドバイスすることはない。改めて言う。帰れ」

でもこれで引きさがる友達ではない。ねばねばくっついてくる。

「いやでも、好きって感情がないわけではないでしょ？」

「ナイナイ」

「かつこいいと思うひとは？」

「いないって、こんな三次元にカッコいいヤツいないから。目を覚ませ」

「三次元にはって、二次元にはいるの？」

「いるわ、山ほどいるわ。とくにあの人は神だ」

「あのひとつて？」

「決まっておるだろう。伊達政宗様だ」

そつだ。伊達政宗様は世界一カッコいいんだ！

私は心の中で政宗様への愛を叫ぶ。声に出てなくてよかった。これ誰かが聞いたら私は変態のレッテルを貼られるだろう。ただでさえ変人と呼ばれているのに。

「私は政宗様が好きだ！愛してる！」

結局声に出した。しかも予想外に大きく。

「だったら分かるでしょ。この気持ち」

「いや分からん。だって私は政宗様に会えないの分かってるもん。伝えられないの分かってるもん」

「そっか……ゴメン。あなたに相談した私が馬鹿だった」

ねばねば女に勝ちました。あんまり嬉しくない。

背中を向けて歩き出す友達に手を振って、見てないけど手を振って、私も帰ろうと後ろを向こうとした。そう、しただけ。

だって、友達が向こう側に行くまでの距離が長い歩道の真ん中に
うずくまっていたから。危ないなーもう世話が焼ける。

私は友達に走り寄って、「大丈夫？」などと言って立たせる。明
らかに気分が悪そうな顔をして、なぜださっきまで喋ってたのに、
なんて心の中で呟いてゆっくり歩かせる。

前を見てみると、なんか知らない大人のひとが私たちを見ながら
何かを叫んでる。

なに言ってるんだろうな、と耳を澄ますと、全く聞こえなかったの
にいきなり大きく聞こえた。

「あぶない!!!」

そのひとが指差す方向を見ると、大きなトラック(?)がこつち
に向かって走ってくる。うわなにそれ、と歩行者信号を見ると赤。

あ、ヤバい。これ事故起こる。

私はとっさに友達を突き飛ばした。友達を引きずるような歩き方
で逃げようとしても二人とも轢かれるだろうと思ったから。

そのあと私も走ろうとしたけど無理だった。もうトラックは目前
に迫ってる。

とっさにさっき買った英雄外伝をきつく抱いて、目をぎゅっと閉
じた。ああもう死ぬんだ。最後に政宗様で天下統一したかったな。

トラックが私の身体を轢いたのが分かった。でも不思議と痛みは
なかった。飛ばされて、宙に浮く感じがした。それでも私は英雄外
伝を離さなかった。

なんてやつだ私は。最後までゲームを守るなんて。いや、ゲーム
っていうか、政宗様かな。これがBASARAじゃなかったら、き
つと私は手を離してた。

ああ、死ぬんだ。死んだあと、冥界で政宗様に会えたらいいな。そう思いながら、私は地面に叩きつけられた。

「いってえ！ヤバいいてえ！痛い！死ぬ！」

私は叫んだ。痛みを忘れるほど痛い痛いと呼んだ。

「ってあれ？」

そこでやっと気付いた。

「生きてんじゃない！」

生きてる。え、なにそれ生きてる。

しかもここドコ？どこですかココ？

コンクリートではなく、土の地面。土埃が目痛い。見た事ある気もしてきたし。

「……BASARRAや。ここBASARRAの…どの戦場だったけ」

あれ、思い出せない。私らしくないなあ、落ちつこう。ていうかここがBASARRAの戦場なわけじゃないじゃん。整理しよう。一回整

理しよう。

まず、私は死んだはずだ。痛みはなかったけどあの衝撃じゃ轢かれた時点で体の骨いくつか折れたはず。それで地面に叩きつけられて、頭打ったよ、飛ばされ方からして。血い出たんだろうな、沢山。

よし次、こっからが問題だ。現在の状況把握。

私の服装は、短パンと半そでのTシャツだったはず。今はどうだ。土がついて汚れてるけど、まあこれは私の服だ。黒い上下の服。無地つてのが自分でも意味不明だなと思った。てかこれ中学1年が着る服か？もつとこつ…おしゃれなの着ない？いや、やめとこつ。これが自分なのだ。

髪型は、まあ変わりない。黒いショートカット。うん、変わらん。持ち物は、なにも無いね。英雄外伝どこやったんだろ。きつと落ちるときにどつかに落としたんだ。

顔はさすがに見れないのでばして、落ちた時ケガしてないかな？あ、案の定してるわ。右足がグロいくらいすりむけてる。うわキモ。

立てるかなー、これ。よし立とう。

「…あれ、なんかいつもより視線が低い……」

あ、そっか、身長縮んだのか。そーかそーか。

「ってありえるかアアア！！なんだそれ！え、ただでさえ148センチなのに！これ以上縮んでどうすんだ！！」

落ちつこつ。これじゃ最初と同じじゃないか。

周りを見てみよう。見たことあるぞこの場所。戦場だ、戦場。 B

ASARAの。どこか忘れたけど。

「ないわー……ないない」

また混乱してきた。よし何度目かわかんないけど落ちつつう。

2 出逢うこと

自分が死ぬって分かっていると、なんか、虚しいというか、悲しい
というか、寂しいというか：自分は立派な人生を送っていたのだから
うかって思う。

「散りぬべき 時知りてこそ世の中の 花も花なれ人も人なれ」

細川ガラシャの辞世の句。意味は確か……

「花も人も、散るべきときに散るからこそ美しい」

そうそうこれ。私は美しくなんて生きてないけど、この句は好き
だ。

「おもしろき こともなき世を おもしろく」

これは高杉晋作の辞世の句。意味は

「面白いことのないこの世を、このように面白く生きてやった」

これだ。私も、一時期この世は面白くないものだと思ってた。

でもこの句を知って、世の中自分で面白くするもんだって分かつた。
だからこんなふうに生きてこれたんだ。

「さつきからなに辞世の句連発してんだ」

「いやあ、もうなんかいろいろと混乱してて……」

「混乱して辞世の句詠むわけねえだろ」

「そうですよねえ……。でももう死ぬんで」

……あれ？この声聞いた事あるぞ！

「どこから来た？」

振り向きながら、私は答える。

「多分、異世界からです」

「多分ってなんだ」

そこには、やっぱりというかなんというか、政宗様がいて、笑ってて。

「自分でも分かんない。だから信じてなんて言わない。それに、夢だから」

「夢？」

「そう、夢。私が死ぬ間際に見てる夢。The dream in front of death」

「アンタ……南蛮語喋れんのか？」

あ、思わず英語喋った。やっぱりどーしよ英語喋れねえよ。

「微妙。喋れるのと喋れないのがある」

「そうか……」

さすがに驚くよね。こんなちびが英語喋ってるんだから。

「名前は？」

「夜宵です」

この時代では名字は名乗らないほうがいいよね。私一般人だし。

「あなたは伊達政宗様でしょ？」

「なんで知ってたんだ？」

さてなぜでしょー？正解はあなたが大好きだったからです！

なんて言えないよね。

「んー……分かんない。知ってた」

ってことにしよう。

あーなんて良い夢なんだ！政宗様と話ができるなんて！でも、夢なんだよね。

「夜宵、異世界から来たってのは本当か？」

「ホントだよ。私はこの世界の人間じゃない。この着物とかここにはないでしょ？」

「確かに、見た事ねえ着物だ。異世界から来たってのは本当らしいな」

あ、信じてくれた？すごいなやっぱり。

「夢ってのは違うだろ」

「なんで？」

私がそういうと、政宗様は私の頬に手を伸ばしてきた。え、ちょっとまってまさか……

「いたいたいいたい……！」

そこでやっと離してくれた。やっぱりな。こづくとと思ったんだ。

「痛かったか？」

「痛いに決まってるよー!!」

「だったら夢じゃねえ」

「あ……」

でも、夢だよ。血生臭いもん。ただ、リアルな夢なんだよ、きつと……

「……夢だよ、夢。だって私、事故にあつて、ぶつかった衝撃強かったもん。痛みはなかったけど、地面に叩きつけられる感触と、骨が折れる感触あつたもん。夢だよ。血の匂いがするし、痛みあるけど、夢だよ。現実味があるだけで。でもなんで？なんで痛みあるの？血の匂いがするの？なんで？なんでなんで……」

違うよ、これは夢だよ。私は友達を庇って死ぬっていうカッコいい死に方をしたんだ。

死ぬっていうのを、受け止めたんだよ。やっと受け入れたんだよ。これが夢だつてことで、受け入れたんだ。

「これ以上……私を、混乱させないで……!」

「夜宵!？」

政宗様が私に近付いてくるのが見えて、私は黒い意識の波にのまれ、そのまま意識を失った。

2 出逢うこと（後書き）

「The dream in front of death」
意味は、

「死の直前に見る夢」
です。

3 興味をもつこと

「夜宵!？」

俺は倒れる夜宵を支える。

気を失っているだけで、あまり心配しなくていいようだ。

異世界から来たと言っていたが、信じられるような話ではない。だが、服装からして少なくともこの国の人間じゃねえはずだ。

「とりあえず、城に連れてくか……」

思ったよりも軽い体に驚きながら、夜宵を担ぎ近くにつないでいた馬に乗る。

小十郎にコイツを見せたらどうなるだろう。

「政宗様!その者は……」

「ああ、コイツは夜宵。拾った」

「拾った、などと平然と言われても困るだけです!」

「拾ったモンは拾ったんだよ」

案の定、予想していた反応を見せた。

女中に夜宵の右足の手当てを任せ、俺は夜宵から聞いた話を小十郎にそのまま伝えた。

「コイツは暫くここに居させる。どうせ行くところもねえはずだ」

「しかし政宗様、どこの馬の骨とも分からない者を城に置くのは危険です」

「さっき話したときの様子では、何もできねえよ。事故にあったから死ぬんだと喚いてたしな」

「ですが……」

「大丈夫だ。俺が面倒見る」

夜宵のいる部屋に向かうと、さっきの女中が手当ては終わったと言ってきた。

布団の中で夜宵が寝ている。取り乱していたときと打って変わって落ちついた顔つきだ。

ふと、思う。コイツは本当に異世界から来たのだろうか。

「The dream in front of death、か」

死の直前に見る夢。

夜宵は、何のためにこの言葉を覚えたのか。それと、夜宵を見つけるきっかけになった二つの辞世の句。

まだ十代であるはずだ。辞世の句など詠むはずがない。ましてや南蛮語であんなこと……

「…だて、まさむね？」

「悪い、起こしたか」

夜宵はまだうつろな目をしていながらも、首を横に振って、大丈夫、と言った。

「ごめんなさい。気絶してた」

「別に気にしなくていい」

「…ありがとう。私、混乱して、何も考えられなくなってた。政宗様に、迷惑かけた」

「様はつけなくていい。それに迷惑じゃねえから」

「本当に、ありがとう。でも様はつけるよ、奥州を統べる方に様つけないなんて失礼だ」

少し微笑んで、体を起こして俺の前に座る。

女中が着せたのか、はじめに着ていた服ではなく、寝着になっている。

「なんか訊きたいこと、あるでしょ」

「よく分かったな」

「さつきThe dream in front of death
hって言ってたから」

そのあたりから起きてたのか気になったが、それもわかったのだろう。意識が戻りかけてた、と夜宵が先に言った。

「それは、私がちよつと心が病んでたときに調べた。辞世の句も、私が詠んだんじゃない、私が生まれる前に生きてた人が詠んだもの。これも病んでたときに調べて覚えた。ああ、今は病んでないよ？今は、元気」

「異世界から来たっつーのは本当なんだろう？」

「うん。私は異世界から来た。さつきは多分って言ったけど、今度は確信。なんで生きてるのかとなんでここに来たのかは分かんないけど」

しつかりとした口調で答えていく夜宵は、見た目の割に大人びて見えた。落ちついてみると美人だ。

「私はね、死ぬはずなんだ。詳しくは言えないけど、友達を庇って事故にあって死を味わった。私は死を受け入れようとした。ここに来たときは、ほんとは生きてると思って嬉しかった。でも、私は死ぬはずの人間だから、やっぱり死ぬんだと思った。怖かった。死ぬのが、こんなにも怖いのだと知った。それで、政宗様が夢じゃないって言ったことに混乱した」

淡々と話すように見えるが、実際はまだ混乱しているのだろう。微かに震えている。

「夢だと思って、死を受け入れようとした。友達を庇って死ぬって言う、カッコいい死に方をしたんだって、思い込もうとした」

段々と震えが大きくなっていき、目には涙を溜めている。それでも懸命に言おうとしているのは、誰かに伝えながら今までのことを整理しようとしているのだろう。

「思い込まないと、自分がなんなのか分かんなくなるから。死ぬのが怖かったから、思い込もうとしたんだ！昔は死ぬのが怖くなかったのに！なんで、やっと生きていこうと思えたのに、なんで……！」
「もういいー！」

話している途中に、夜宵は泣き始めた。

気づいたら俺は夜宵を抱きしめて、夜宵が驚くのが分かった。

「死ぬのが怖いのは普通のことだろ。それに、今は生きてんだ。どんな状況だろうと、生きてんだよ」

それから夜宵が落ちつくまで俺は夜宵を抱きしめていた。

4 疑うこと

「名はなんだ」

「やっ夜宵です！」

「歳は」

「た、多分この世界では14です」

「多分？」

「えと……向こうの世界では生まれた年は0歳と数えるもので……」

本物こえーよ……。小十郎怖い。マジ怖い助けて誰かアアア！！
起きてからしばらくしてから小十郎に会うことになって今に至る。
いやマジ怖い。

政宗様は私の反応見て楽しんでるし……見てるなら助けるボケ。
正座して小十郎の前にいるのだが……だよ、普通私みたいなヤ
ツ他国の間者かと思われるよね。

20

「異世界から来たっつーのは本当か」

「そうだと思われます。私のいた世界とは違うんです。ここのこと
は知ってたけど……」

「知っていたのはなぜだ」

「それは……」

ん？あれ？なんで私この世界のこと知ってるの？分かんなくなっ
た……。

ここに来たときはなんで知ってるのか分かってたよね？何だっけ？

「忘れました。多分ここに来たとき強く頭を打ったんでそのときど
つかに記憶を落としたと」

他のいらぬ記憶はあるのに…。なんか大切な記憶落とした気がする。

「私は死ぬはずだったんです。別に無理に信じろとは言いませんけど、死ぬときにこの世界に来たんです。なぜかは私も分かりませんが、こつちが教えてもらいたいですよ、まったく。はじめは夢だと思っただんで、あまり気にしてなかったのでもあ落ちついていられたんですが、夢じゃないって分かったらもう何が何だか分かんなくなってます」

あ、また自分が分かんなくなつた。氣い失わないように落ちつけ自分。

「とにかく、私は異世界から来ました。それは事実です。なので他国の間者ではなので安心して下さい。私なんかには何かできるワケでもないし」

よし、これでOK。さあ信じるか信じないかはあなた次第だ！
そついや政宗様は何してんだろ？って思つて政宗様を見ると、案の定満面の笑みを浮かべている。そんなに楽しいか！

ていうか黙らないで頂きたい。怖い。つらい。なんかこう…空気がピリピリしてる。

「わ、私は、死ぬべきなので死に行きますよ？政宗様に助けてもらつて何ですけど、死に行きますよ？」

「Ah？何言つてやがる」

「え、なんか駄目なこと言いました？」

「当たり前だろ。軽々しく死に行くとか言うんじゃない！」

いやいきなり怒らないでよーびっくりだよ！てか死に行っちゃ

ダメか！

「アンタの世界ではどうだったか知らねえが、この世界では死にた
くなくても死んじまうヤツだっているんだよ！」

……ごもつともなお言葉ありがとうございます。でもね、私は、

「死ぬべきなんだもん！死なないとおかしい」

「じゃあ今生きてんのはなんでだ！？」

「知りませんよそんなこと！」

「生きるべきだから生きてるんだろ！？なのにまた死のうとなんて
してんじゃねえ！」

「It is my freedom！」

「No！」

「Why!? It is my life！」

「It is a surrounding human being
that sheds tears of sadness
！」

「いやそつから分かんねえ！！」

「悲しみの涙を流すのは周りの人間だ！」

「だからって私にそこまで考える時間は与えられなかった！」

一瞬の出来事だった。事故つてのはそういうものだってわかって
たけど、実際に被害者になったら真っ白だった。

何も考えられない。何もできない。そんな虚しさを知らないから、
そんなことが言えるんだ。

「なにも出来ないんだよ…死を、真正面から受け止めないといけな
かった。覚悟を決めたのに生かされるなんて意味分かんねえ！」

「覚悟なんてこの国の武士から農民まで普通に決めてる！」

「それは何かのために覚悟してんだ！私は何かのために生きるなんてできない！私には存在意義がない！」
「だったら俺のために生きろ！」

……は？なにそれ何その存在意義。聞いたことないけど。

「この世界に来たとき俺に助けられた。その恩を返すために生きる。

You See？」

4 疑うこと(後書き)

「It is my freedom!」 「私の自由だ!」

「Why? It is my life!」 「なぜ? 私の人生だ!」

「It is a surrounding human being that sheds tears of sadness!」 「悲しみの涙を流すのは周りの人間だ!」

5 決めること(前書き)

ちよつと短いかもしれません。

5 決めること

「……は？」

いやいやいや、それはないでしょう。確かに恩を感じてるよ？だって見知らぬ世界に放り出されてびっくりしてたところに政宗様が来たんだから。一人だったら怖いじゃないか。

「……Is a thinking circuit norma
l？」

「ふざけんのも大概にしるよ？」

あ、分かったのね。難しかったのよこれ英訳するの。大変だったんですよ？分かるって流石だね。

まあ私みたいな一般中学生を比べちゃいけないだろうけどさ。

「あの…よく分かんないんですが…」

小十郎、今だよツッコむの。政宗様を諫めてくれ。頼む。

「俺は別に分かりづれえことは言ってるな」

「言いましたよ……全くわかんない」

「ただ俺のために生きるっつってるだけだろ」

「それが分かんないの！」

分かるわけないっしょ。この世界に来たことより意味分からんわ。

「聞いたことないよ、恩返しのために生きるなん……て」

あ、そつか……。恩返しのためか。俺のため俺のためって言ったから何か分かんなくなってた。でもそれなら生きていけるかも。

「理解できた！恩返しのために生きるのか！」

「遅せえよ」

「それなら生きてける！かも」

「最後のかもつてのはいらないだろ」

かもつてのは必要ですよ。だつてもし生きて行けんかったら大変でしょ？

「I live for you」

にこやかに言ったら政宗様も笑った。小十郎はけわしい顔してるけど。

よし、あれを言うか。

「The reason for living is your sake」

「I will accept it」

「一種の契約ですね」

「確かにそうだな」

なんか軽くなった。気持ちか。

生きる理由ってこんなに簡単に決めちゃっていいのね。いやダメだろうけど私はこれでいい。

「小十郎、異論はねえな」

「言っても聞く気はないでしょう」

やっぱり小十郎は分ってくれないのかね。ちょっと寂しい感じがする。

「夜宵」

「はっはい！」

うおう。びっくりするからいきなりはやめてくれ。って思ったけど言わないよ？

「政宗様が信じるのなら、俺も信じよう」

「あっ有難うございます！」

うわ嬉しい。なんか嬉しい。めっさ嬉しい！！

心の中で私は叫ぼう。小十郎いい人だ！！

ん？ということとは、どうなるんだ私？

とりあえず新生活！！始まる！！と思う。

5 決めること（後書き）

「Is a thinking circuit normal?」

「思考回路は正常ですか?」

「I live for you.」 「私はあなたのために生き
ます」

「The reason for living is your
sake.」 「あなたのために生きましょう」

「I will accept it.」 「俺はそれを受け入れ
ます」

6 監視すること

「で、具体的にはなにをしたらいいのか分からないです」

うん。恩返しとかしたことないからね。私に何かしてくれるのは友達くらいだったから、そんなに恩返しとか意識してやったことないし。無意識に向こうも何かしてくれたいし、私も気付いたら向こうが喜んでくれたし。

この時代で国主への恩返しと言ったら執務のお手伝い？
それとも女中になった方がいいか？

「それは……小十郎、お前が教えてやれ」
「はっ」

さらっと押しつけましたね。いいですよ別に。小十郎は悪いひとじゃないの分かってるから。

「よろしくお願いします」

でも小十郎に教えてもらうつつつつてもね、何を習うのかわかんね。まあ、なるようになるばいいか。

「で、なんでここにいるんだ？」

「いや、小十郎さ…小十郎が政宗様を監視しておけ、と」

何したらいい？って訊いたら監視って言われて。あと、さん付けで呼んでたら呼び捨てでいいって。

「小十郎…何考えてんだ…」

「政宗様は仕事あんましてないから小十郎困ってたぜ？」

「男みてえな話し方するな」

「昔からこうだったんで」

男勝りな性格と曲がったことが嫌いだったからこんな人間になったのですよ、すいませんね女らしくなくなってます。

「こんな性格だから友達庇って死ねるんじゃない？」

「それもそうだな」

規則破るの嫌いだったしな。正義感だけは人一倍あって、そのせいでいじめられたりもしていたんだが。

未練はないよ。精一杯生きたって思えるようになったし、それに、ここで新しく生きていくことになったし。

政宗様が仕事しているのを見るの飽きて、外見てたら時間が静かに過ぎていくのが分かった。前の世界では、誰もが早足で歩いて、働くことだけ考えているようだった。大切であるはずの自然を壊し、周りの人間より自分を優先していた。誰かを傷つけても何とも思わない。

こうして第三者の視点で見ると、悪いところが沢山見えてくる。いいところもあるけど、あんまり見つかんない。

科学が進歩しているところ、医療が進歩しているところ、生活が便利になったところ。これくらいか？

「……よく分かんないな」

「何がだ」

あ、声に出た。

「前の世界の良さが分かんなくなった。生まれ育った世界なんだけど、よく考えたら分かんないなって」

「別の視点で考えた、ってところか？」

「うん。確かに平和で、飢えるようなことはなかったけど、人間関係が狂ってるように思えるんだ。それって本当に平和なんだろうかってね。……あ」

「どうした」

「政宗様、私いいこと思いついた」

私頭いい！なんてな。

「あのさ、この国と周りの国のこと教えて」

「Ah?いきなり何だ」

「第三者の視点だよ！第三者がどう思ったかかって言うのが大切だと思う！あと、私この時代の未来をちよつと知ってる！」

最後のは何だ？私自分で言っというて分かんねえよ！未来知ってるのか！？

……まあ知ってるちゃあ知ってるな。今思い出した。ここのこと少し知ってるんだった。

「未来が分かるっつーのは信じらんねえが、意見を聞くのはいいと

思ひぢぞ」

「このことをもつと知つたら政宗様の仕事、もつと手伝えると思
うんだよね」

「よし！教えてやる！」

どんだけ仕事いやなんですか。

でもまあ、私も手伝いたかったしいいか。

7 未来のこと

「九州は島津、中国は毛利、四国は長曾我部、近江は浅井。尾張の織田、その他豊臣、武田、徳川、今川、北条、本願寺、上杉が力を持つてるな」

途中からアバウトな説明だな……。まあ後で小十郎に教えてもらうとしよう。

織田がいるってことは、まだ第1期のとこか（よく分らんけど『第1期』という単語が出てきた）。

今はだいたい平和っぽいから暫くは心配ないとして、いつでも出陣できる用意が出来てた方がいいよね。織田は史実でも強い勢力を保ってたから。

「国内はなんか心配事とかある？」

「今のところはねえ」

「そっかあ……」

いつきの一揆は起こったのかね？でも訊かないほうがいいよな。未来が分かるっつーのは信じてもらえなかったし。

「ということはつまり、国内をもっと良くする絶好の機会ってことね？」

「まあ…そっだな」

あつれー政宗様、目が泳いでますよー？あ、そっかあ。戦は好きだけど執務は嫌いだからねえ。国内を良くするってことは執務が必然的に増えますもんね。

…声に出てねえよな？こんなこと言えねえよ。最近考えてるだけだと思つても無意識に声に出てるんだよな…。

「さて、私にもできること見つけたよ。まず政宗様を監視すること」

「そっからか！」

「え、だって大切じゃん。んで、政宗様の仕事の雑用」

「雑用くらいは普通だな」

普通つてなんだ。まあ普通だと思っけどさ！

「あと、戦の策を一緒に考える！」

「それはだめだ」

「えーなんで？」

「お前この世界のこと知らねえのに策考えられるワケねえだろ」

「いや、だからさ、基本的な知識はあるって」

「証拠を見せたら許す」

ああもう！信じろよ！

証拠とか言われても知識は目に見えないじゃないか！

「分かったよ。なら今から少しだけこの世界の未来の話をしてやんよー」

本当はダメだと思っけど…。仕方ない。

「まず、これから織田は脅威になる。人を人とも思わないっていうのはこのことだよ。自分が気に入らないヤツ、自分に牙をむくヤツは全員殺す。皆殺しだよホントにもう。」

織田をなんとかしようとして、甲斐は各国に同盟を呼び掛け、織田包囲網を展開しようとする。しかし、そう上手くはいかない。当然

だよ。天下取り合ってるのにいきなりみんな仲良し〜ってできないもんね。

奥州も織田包囲網に参加しなかった。伊達軍は単独で織田討伐を決意。

ここまで教えたら信じてくれる？」

未来を教えたら、それによって未来が変わる可能性があるから教えたくなかったんだよ。

ていうか、いくつかパターンがあつてどれを教えたらいいのか分からないからメジャーなの教えただけ…これでいいのか？

「こつから先は教えたくない。未来が悪い方向に変わったらいやだから。」

「…無理に信じてとは言わないけど、出来れば策を練るときには私にも相談してほしい。私の世界でも、そういうことはしてたから」

信じてくれるなら、これ以上のことは望まないんだけど。

8 信じてもらおう

えーっと…

「黙りこむのはやめてくだせえ!!」

あのさ私沈黙つての嫌いなよ! やめて黙らないでえええ!!

「…信じがたい話だが、確かにあり得ない話ではない」

「いや、ですから、本当に私の脳内に知識として埋め込まれているものでして。他にもイロイロ知ってるんですよ?」

「じゃあ他に何を知ってた?」

「えっと…政宗様の幼名とか…過去とか」

「んな事知ってるんなら未来のことも知ってるな」

なんですかそのちょっと悲しそうな顔…。

…過去、知られなくなかったのかな?

「夜宵、お前俺がどうして独眼になったか知ってるのか?」

私を見ずに、本当に悲しそうに言った。

…私は、どう答えたらいいのか?

「知ってる…よ。政宗様は、私に知られなくなかった?」

「いや、知られても知られなくてもどうでもいい」

「そっかあ…。でもさ、これだけは言わせてな」

確か、独眼になった当初は、そのことをとても気にしていたはずだ。

史実では気にしなくなつたと言われる歳になつても、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ気にしているようなそぶりを見せていた。

「私は、その過去を知っていても、その眼帯の下のことを知っていても、政宗様を嫌いにはならない。むしろ、その独眼は戦った証でしょう？ 誇れることじゃないか」

昔、政宗様が、眼帯をしていなかった頃。

政宗様のその目を見て、誰もが目を背けた。

特に女は、それを「化物」だとかなんだとか言つて、幼い政宗様を傷つけた。

そして、政宗様の母も

「大丈夫だ、私は知ってる。政宗様がとても優しく格好良いひとだつてこと」

なんでだろ？ 泣きそうになつてきた。

私なんかと重ねちゃいけないんだろうけどさ、私も、嫌われていたんだよね。母さんに。

「誰が、」

政宗様が、少し怒つたように私の頭に手を乗せて、言った。

「誰が気にしてるつった？ そんな昔のことなんざもう気にしてねえよ」

「むう…ひとが折角気遣つてやつたつてのに…」

「ありがとな」

え、何！？いきなり何！？
いきなりなぜそのような事を言い、なぜそのような優しい顔を
してるんですか！！！？？

「ま、少しは気にしてたんだろうよ。自分でも知らねえうちにな
…ん？」

ナニヲイツテイルノカナ？

「アノ…ニホンゴガリカイデキマセヌ」

「なんだそのじゃべり方」

いやそこ笑うトコじゃないですよおお！！

「気にしてたかもって話だよ。忘れる」

「？了解しましたー」

駄目だ。理解できない話は無視だ！ポイだポイ！

「んで、信じてくれるの？」

「Ah…とりあえずは、信じてやるよ」

「うわナニソレ。とりあえずってなんだそれ」

「はい信じますって言うほうがおかしいだろ。信じたら軍の方針も
変わってくるだろうしよ」

「まあそうですね…」

なんか嫌だ。政宗様には信じて欲しかったんだけどな。あ、いや、
小十郎が信じてくれたのもとてももうれしかったけどさ。

なにせこの世で一番好きなひと…ってオイ！何考えとんじゃ俺！
なんか声に出たら恥ずかしいぞ！出てなくても恥ずかしいぞ！

8 信じてもらうこと（後書き）

次は城の中を探検します！

9 探すこと(前書き)

短くなっちゃったと思います…。

9 探すこと

「うーん……」

広い！案外広い！結構広い！

城の中って、案外広いのね。小十郎のトコと政宗様の執務室と、あと寝かされてたトコにしか居なかったから、広さなんてわかんなかったし。広いわな、さすがに。一国の主だもんな。

「政宗さまー…どこいったのー？」

あんまり大きな声を出さないようにして、ちょっとだけ呼んでみる。

ていうかさ、あの足の速さ、流石だって思う。竜だけあるね、うん。関係ないと思うけど。

いやー、あのスピードは凄まじかった。向こうの世界のオリンピック選手並みだね、絶対。つかそれ以上だね。半分私にスピードくれ。

欲しい、っていったら、身長も欲しいなー。私ちっさいからなー。まあ……こっちに来たとき縮んだかと思っただけど、変わってなかったってのは嬉しかったな。これ以上ちっさくなったら困る。本気で。

っーかさ、どこいったんじゃー！！！！

怒られんの絶対私だよな！？ねえ！？恐いんだぜ小十郎は！さっさと出て来いよー！ココどこだよー！

心の中で激怒。

「ホント…心細いんだよ……」

なんで見知らぬ世界に落とされて見知らぬ城を一人で動き回らないといけないんだ……。

実は私、独りなの嫌いなんよ？怖いんよ？やめてよ、ココどこだよ。

「はあああ

」

T A M E I K I !

さつさと見つけてしまいましたしょうかねえ……。でもなあ……現在地が分からないんだよなあ……。

「だれかあああ！……！……！」

堪えきれず叫んじやいました。

ホントさ、どこに居んのよ政宗様。

『笑いなよ。そんな顔してたってさ、探し物は見つからないよ？失くした物にも心があるから、君が戻ってくるのを待っているのだと分からせてあげなきゃ』

いやいやいや、政宗様はものではない……ってなんだそれ！？
だれ！？今のだれ！？

周りをきよるきよると見回してみただけど誰もいない。

うーん……だれだよ今の。

その前に私はそこまで暗い顔をしていたのか？くっつそ、気付かなかった。

「よしつ。も一回探そう！」

今度こそ探し出してみせる……！

10 見つけること

「…どこどこだ」

探すって歩きまわったら完全に迷子になってしまいました。
どうしたらいいんじゃないボケ。

「あれ？どうしたの？」

「えっと…どこぞの国主様が逃亡したので探してたら迷子になりました」

「へえー」

「あの…どちらさままで？」

後ろから声かけられんのに慣れちまったよ。

もう平然と受け答えできるようになった。前は人見知りするタイプの人間だったのにな。

「俺？俺は伊達成実ただしあきね」

しげさね…

ああ、政宗様のいとこの方か。
確か『成実』って書くんよな？

「成実さんですか。私は夜宵です」

「よろしくね」

ほう。友好的。

「夜宵ちゃんかあ。梵が拾ってきたっていう」

「捨っ…」

そんなふうに出てたんか政宗様。別に間違っではないけどさ、もつと他に言い方ないんかな？らしいっていったら、らしいけど。

「で、梵を探してるの？」

「はい…」

「そっか、逃亡癖あるからねえ」

…予想はしてたけど、どこまで仕事嫌いなんだ。

おかしいよ、どう考えてもおかしいよ。どんだけ嫌いなんだよ。それでも一国の国主か？

「あの、どこにいるか分かります？」

「うーん…いろんなところに隠れるからねえ」

隠れるんか！逃げるだけじゃなくて隠れるんか！

よし、片っ端から探してやる！私は小十郎に叱られたくない！

「よかつたら俺も探すの手伝おうか？」

「え、いいんですか!？」

「どのみち梵に用があつて来たからね」

「あああ有難うございます！」

いい人だ…成実さんいい人だ!!

「じゃ、行こうか」

「はい」

さて、搜索活動再開だ。

私の苦勞はどこに…つか最初から逃げんなよ。

「なんでって言われてもなあ。俺の執務室だし？」

「知るかよ。だったら逃げんなよ。オレの苦勞どうなるんだよ！！」

終始探してるの小十郎に見つからないようにビクビクしてたんだぞ！

「おい…」

「…なんですかその低い声。いやもとから低い声だけ…」

「オレって言うな」

「はいはい。あなたが逃げなくなったらね」

ホント逃げなくなったら…監視し始めてすぐに逃げるとかないだろ。

成実さんだつて用事あるから来てんのに…

「他人に迷惑かけんな！」

「まあまあ、夜宵ちゃん落ちついて」

「落ちついてます！これでも落ちついてます！」

「梵の逃亡癖はいつものことだから」

うっ…

多くの人が迷惑だつたと思うと…この先この人の逃亡癖にどれだけ振り回されるのか…ヤバい。泣けてきた。

「成実さん…有難うございました」

「こちらこそ。面白い話が聞けて楽しかったよ」

はあ…なんでこんなに差があるんだろ…

政宗様も見習えよ。

こんな生活が続くなら……

「体力…もっとつけよう…」

10 見つけること（後書き）

私的に、成実さんは楽観的に見えて実はいろんなことを考えてるひとだと思えます。

11 姉の話 (前書き)

今後につながる大切(になるであろう)話です。
主人公さんの姉のお話。

11 姉の話

妹が死んで、すでに1カ月が過ぎた。

結構慕われていたようで、あいつの葬式には友達が沢山参列した。

「ボクだって、悲しかったんだけどなあ……」

私は、泣けなかった。

悲しかったけど、泣けなかった。

なんでだろうねえ。私だって同じくらいに、いや、それ以上に悲しかったはずなのに。

なのに、泣けなかった。

あいつの、夜宵の死体は、大型トラックにはねられたにしては綺麗だった。

頭を強く打って死んだらしい。

それで、あいつはBASARAを抱きしめたまま死んでいた。

どこまで好きなんだ。たかがゲームじゃないか。

あれを買いに行かなければ、死ななかったかもしれないのに。

「結局は、ボクのせいか……」

私が壊したから、新しいのを買いに行かなければいけなくなったんだ。

あいつが抱きしめていたBASARAを、私はまだ触れていない。プレイすることはおろか、触れてさえもない。触れたら、駄目な気がした。

今日もまた、夜宵の部屋に入る。

私とは違って、几帳面だったからとてつもなく綺麗に整理されている。

机の上のパソコンの電源を入れ、BASARAの公式ホームページへ。

お気に入り登録されたそのページは、もう見慣れたものになっていた。

「…あれ？」

なんだこのコンテンツ。

見たこともない、新しいコンテンツがきている。

興味が出たから開いてみると、そこには見覚えのある名前と、見覚えのある服を着た少女が。

「夜宵…!？」

どう見ても夜宵だった。死んだときに来ていた黒いTシャツと黒いショートパンツを着た夜宵。

しかも伊達政宗である条件をクリアするとプレイヤー武将として登場してくるらしい。

「なんだそれ…」

びっくりだ。なんで我が妹が…

すぐさま私はチャットへ行つて結構前から知り合いのネット友達に話を聞いた。

【森羅：今BASARAの公式ホームページ見たんだけど、新しい武将出てたよね！？】

【ガルナ：え？そんなん出てないけど】

【森羅：出てたって！夜宵つてのが！】

【ガルナ：ああ夜宵ね。前からいるよ】

【森羅：いやいやいや！ボク知らなかったし！】

【ガルナ：だーかーらー！いるって！】

【森羅：いなかったよ！】

【ガルナ：いたつつつてんだろ！つかいきなり何？】

【森羅：妹なんだよあれ】

【森羅：1か月前死んだ妹】

【ガルナ：いやさ、そっちのが信じられんけど】

【森羅：ホントだよ！だって夜宵つて妹だしそもそもあの全身黒づくめあんまないから！】

【ガルナ：句読点少なくて読みづらい。なんとかしろ】

【ガルナ：それに黒づくめなんて世界中に沢山いるから】

【森羅：だって…】

【ガルナ：まあ、なんとかして夜宵使ってみな。使いやすいから】

【ガルナ：俺堕ちるノシ】

逃げた

！！！！

「とりあえず…ばさらを、やってみよう」

英雄外伝ので出てくるらしいので開けてもいなかった中古のBASARAを開け、PS2をセット。

OPは飛ばして即天下統一へ。

伊達を選ぼうとして、レベルMaxだというのに気がついた。

本当にあいつは伊達が好きだったな…

「政宗様」とか言っただけになにかあったら必ず伊達思い出してたし。

助けられたとかも言ってたしね。

そこでふと気付いた。「ある条件」ってなんだ。
ネットで検索すると、なんとまあ簡単に見つかった。

それからしばらくして、天下統一し終わると、条件をクリアして
いたので、夜宵が出てきた。

声も何もかも夜宵で、突然涙が出てきた。

葬式でも泣けなかったのに、なんでこんなときに…

すぐに天下統一をしていると、夜宵のセリフが、もっと泣けるよ
うなことだったのが、つらかった。

「ごめんな…」

初めて、あいつに謝罪の言葉を述べた。

11 姉の話 (後書き)

現実をぶっ壊しました(笑)

12 稽古のこと(前書き)

前話とほぼ同時刻の主人公さんの話。

主人公さんの姉が次に出てくるのはいつでしょうね？

12 稽古のこと

この世界に来て1カ月が過ぎました。

もう城の中くらいじゃ迷子にならないよ！もう政宗様を仕事に逃亡させることもなくなつたよ！

小十郎はいいひとだよ！

いやあ、初めはさ、ちよつと恐かつたけど今は平気です。

なんにしろ、小十郎が育てた野菜は旨いぜ！

一回畑を見てみたいと切実に願います。

そついや、1カ月たつても城の外に出ていない事についてどう思いますか？

もともと私がインドア派なだけあつて城から出ないし、政宗様は別に無理に外に出そうとしないし。

ずっと監視ですわ、はい。

ああ、変わった事つていたら、最近は政宗様と小十郎に剣術(?)を教えてもらつてる。

前の世界でも剣道と柔道とその他諸々の武術は習つてたりしたんだけどね、やっぱいざという時使えなかつたらシャレにならないからね。つかやっぱ政宗様と小十郎は強い。私なんか足元にも及ばない。前の世界では全国制覇したんだけどね。怖いな戦国時代。

稽古のときは容赦ない二人。私は恩人に手エあげられないからちよつと手加減してんのに、あいつら怖いよ。女にも容赦ねえよ。考えるだけで恐ろしい。いつか殺されるわ。

そついや姉はどうしてんだろ。私が死んでどうしたんだろ。きつと泣いてねえよな！。悲しんでもないだろうな。無口・無表情・無感情の姉だから。まあ学校内だけの話だけ。

家の手伝いとかしてるんだらうか。そこだけ心配。

今日もいつものように稽古から始まる。でも今日は小十郎はいない。用事があるらしい。忙しいひとだねえ。

「政宗様あ、正直本気でかからんと私死ぬよね？」

「当たり前だろ？お前手加減してたのか？」

はい。がつつり手加減してました。超してました。なんて返事ができるはずもなく。

「いや、手加減つつーか…」

曖昧に答えておきました。

そしたら政宗様の木刀が弧を描き私に向かってくる。突然だったから避けようにも避けられずに私も木刀で受ける。

「いきなりはやめましょーよ」

「お前が手加減してんだつたら俺はもつと本気出していいんだよな？」

「いや、ヤメテ下さい。私死にます」

そう言ったらなぜか今までにないくらい強く力を込められた。ちよ、マジで腕折れる。

必死で歯あ食いしばって耐える。しかし表情だけは変えないように。戦ってる最中に表情で必死さを見せちゃなんのですよ。

「腕折れるー！ヤメテー！本気出さんでー！！」

「Ah？本気じゃねえよ」

「ごめんなさい私が悪かったです本気出しますだから許してー！！」

心の底から謝ったら、ふっと力が抜けた。

腕がギシギシいうくらいだったから本当に助かった。本気で折れるかと思った。

くそう、仕事るとき手伝う量減らしてやる！

顔に政宗憎しが出たのか、政宗様に頭を軽く小突かれた。

貴様の小突くのは結構痛いんだよ！

13 仕事のこと

「ああ…腕がイタイ…」

頑張つて稽古の間は耐えたものの、なんかご立腹の様子で政宗様の力に耐えられるはずもなく。最後らへんは私もキレて本気出しかけました。

いやーやっぱり恩人に手はあげられん。それがどんな状況であっても。私は恩人に手をあげることはいし出来ない。

稽古が終わつた後の仕事に心配だ。っていつかすでに始まっているのだが。

「政宗さまあ…ホント痛いですが…」

「お前が悪い」

ああそうですかそうですか！分かってますよ！手加減することは相手を馬鹿にしているのと同じだって分かってますよ！

全く…それでも私の気持ちを分かってくれよ。

「…あのですね、政宗様？最近私のトコにまわってくる仕事が多くなってきたと思うんですが？それに今日は特に多い気が…」

「お前ができるつつつたんだろ」

「いやいやいや、一応私別世界に居ましたからね？」

現代的な文字しか使わなかった世界だからね。私くらいだよ、この歳で古文とかの意味がすぐにわかったり文字読めたりするのは。でもだからってさ、ちょっとは気い使つて下さってもよろしいのでは？っーか自分の仕事減らしてるだけだろ。

まだ休めんのか！どうして？私は沢山働いたはず…

「…夜宵八、スデニ死ンデシマッタ」

「何言つてんだ。まだ死なせねえよ！」

「かはアッ」

「いかにも吐血しました、みたいな声出すな！」

「だつてえ…」

「だつてじゃねえ！小十郎もそろそろ帰ってきてるはずだ！いくぞ
！」

「え、どこに？」

あ、今無知だと思った？勘つてもものがないと思った？そんな顔して
るよ政宗様。

仕方ないじゃない、私疲れてるんだから。

「…まあいい。いくぞ！」

「いえっさー…」

はあ…やる気出ねえ。

13 仕事のこと（後書き）

いやあ、主人公さんは最近疲れてるようです。

14 戦のこと

「あ、はい」

連れてこられた部屋にて。

まさに引きずられるように連れてた事により、私の疲労はピークです。疲れた。

さて、帰ってきてた小十郎の話によると、織田がちょっと大変な事になってるらしい。

ついに来たか、って感じですね。脅威になったらしいですよ。んで、これからどうするか、ってことに。

知らねーよそんなん。どうせ信じてくれないんだから。あ、いや、拗ねているわけではないよ？ただ、別に言ってもしかたないだけ。

「…そろそろ、あれか」

「Ah?なんだ？」

「いえ、何でもありません」

さすがにね、ここまできたら言っちゃいけない気がする。

これから　　が　　で　　にて　　が起こるとか。言ったら変なことになると思う。なので、言いません。

「んでさ、戦準備してたほうがいいと思うよ。あと戦が始まったら私も連れてけ」

「それは駄目だ」

「えーなんでえ？」

「女だからだ」

「差別！差別したらいけないんだよ！」

差別って駄目なのよね。少なくとも向こうの世界では。ここではわかんないけど。

「私がいたら便利だよ！だいたい何でもやるし！なんか意味ワカランことになったら対処法教えるよ！」

「それでも駄目だ。つか自分で自分のこと便利だ、っていうんだな」

だって便利じゃないですかアアアアアア！！

未来分かるんだぜ？便利じゃん。

「む、ならいいよ。行かない」

拗ねてやる。不貞腐れてやる！全部政宗様のせいだからな！せつかくひとが役に立ちたいと思ったのに！ひとの善意を踏みにじるな！

「行かないしもう仕事の手伝いしかないから。もう私は仕事を無でこなす抜け殻になるから」

泣けるよもう。政宗様は馬鹿だな。終わってる、頭が。

私だって分かってるよ。危ないから連れて行かないんでしょ。分かってるよそんなこと！だけど、行きたいんだよ。

だって死ぬかもしれないんだ。もう帰ってこないかもしれないんだ。

死ぬってというのは、全てが消えてなくなるんだ。残された者がつらくて覚えていても、いつかは偉大な時間って奴が傷をいやして忘れてくんだ。忘れさせるんだ。

最後になるかもしれないから、せめて、最後になるそのときまで、傍にいたいんだ。

政宗様は、私の恩人だから、傍にいたい。

「私はこの城に残るよ。それでいいんでしょ」

小十郎が政宗様を諫めるような目で見ていた。政宗様はそれに氣付いて怖がった。

んで、私は諦めた目で政宗様を見て、ちよつと馬鹿にしたような視線を紛れ込ませた。氣付いてんのかね？

15 姉の感情 (前書き)

主人公さんの過去(?)がちょっとだけ分かります。
多分。

15 姉の感情。

ゲームの中の夜宵はとても生き生きとした顔をしていた。

それに、使いやすいだけでなく、強かった。強すぎだった。

こっちでも剣道の全国大会の常連で普通に一位だったり普通に連続で一位だったし。それ以外も柔道とか全国制覇してたし。なんとまあ未恐ろしいガキ。死んでるから未恐ろしいとは言わないのだからうけど。

生きていたときは、成績優秀、容姿端麗な完璧人間だった妹。なんでも出来て誰にでも公平な妹。怖いくらいに正義感が溢れてて、他人を助けるためなら命をも惜しまないような妹。今回死んだのだから友達を庇って死んだ。

夜宵は音楽の才能もあって、部屋にはお小遣いをためて買ったシンセサイザーが置いてある。作詞作曲が趣味とかいう変わった中1だった。編曲も自分でやってて、なかなか、というかプロ並みの曲を作ってた。歌うのも好きで、小学生のころから合唱コンクールとかの独唱をやってた。しかも全部金賞をとってた。

そんな妹は周りから大きな期待の目で見られていた。中学の受験はしなかったものの、高校は国立高を受けさせるとかで母さんが騒いでたな。

塾とかに通わせてもらっていたわけではないけど、本当に頭がよくていいヤツだった。

姉としては、そんな妹が嫌で嫌で仕方なかった。自分は期待されてないのに、って。

でもアイツが死んでみて、分かった事がいくつもある。

期待にこたえるためにアイツがどれだけ努力していたか。どれだ

けつらかったか。

本気でアイツが死にたいと思っていたか。どれだけ病んでたか。

夜宵の机の中から出てきた大量のノートには、死にたいだとかつらいだとか、そんな事が書かれたノートもあった。

丁寧な字で簡単に分かりやすくまとめられたノートの類たぐい。私が分からないところも普通に書いてあった。そのページには『姉に勝てる部類』と書いてあった。

なんのことだか初めは分からなかったけど、古いノートに書いてあった『姉には勝てない』というのが関係しているのだと思う。

どちらにせよ、私が夜宵にとっていい姉ではなかったことは確かだ。

こちらに見向きもしない親や親戚たちのことを、すべて妹のせいにした。そして、暴力だって妹に振るった。そんな姉、誰がいい姉だというのだろう。

あるとき、夜宵が言ったこと。

『姉さんは自分から何かをしようとしなから何もできないんだ』と。

そのときはただイラついただけだった。けど、今ならわかる。

私はすべてをひとまかせにしておいて、他人に目をむけて欲しいと願ったのだ。

全力で自分を見てもらおうとした妹を妬んで、嫌った。

すべて、私の怠慢なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0124x/>

死ぬる体、生きゆく心

2011年11月21日22時43分発行